

火野葦平の〈戦争〉Ⅱ

——中国戦線からフィリピン戦線へ——

六、宜昌作戦と桃園会

フィリピン戦線に従軍する約一年半前の一九四〇（昭和一五）年六月、火野は中支の宜昌戦線にあった。中支―南支戦線とフィリピン戦線とは〈戦争〉の質の違いは歴然としていた。相手が広大な中国大陸と南方フィリピン群島という地理的な違い、蒋介石率いる国民党軍ならびに毛沢東率いる八路军（中国共産党軍）と〈米比軍〉との違いという点にあったばかりではない。ふたつの戦線の間には、一九四一年一月八日の英米に対する宣戦布告という日本の追いつめられた重圧があったからである。したがって戦術・戦術とともに軍隊のありかたもまた違っていた。ふたつの戦線の違いを知っていたのは、中国大陸からフィリピンに移動させられた第四師団（通称「淀」）の古参の強者兵だったが、火野葦平もその一人といえた。

火野がフィリピン戦線に従軍したちょうどその頃、「国民文藝叢書」の一冊として桃園会著『宜昌戦線』（一九四二・一、博文

館）が出版された。装幀は火野が手がけている。この本は、軍部による正式な報道班員が菊池寛らによって組織化される以前のものとしてもう少し注目されてよいだろう。ただ全行程は軍報道部からの特別な便宜を受けなければ実現することはできなかった。

「桃園会」は竹田敏彦、大佛次郎、火野葦平、棟田博、木村毅の五人を同人とする組織である。『三国志』にある張飛が関羽と桃園で義を結んだことからつけられている。「序」によると、一九四〇年六月に宜昌作戦が始まった頃、中支派遣軍司令部から〈二三雑誌社を通じて文学者数名の招聘〉があり、それに選ばれたのが五人であった。宜昌作戦の立案者は陸軍軍務局長の武藤章中将⁸だった。

六月一四日、南京に集合した五人は飛行機で漢口^{ハンカウ}に到着、汽車で孝感に着き、それからトラックと自動車を利用して応城・安陸・当陽を経て宜昌に入城した。ふたたび当陽に戻り、荊門・安陸を経て応城に戻るといふ行程をたどった。五人は（いつでも、何度でも、一緒に従軍したい）というほど仲がよかった。五人のうち、火野葦平と棟田博は帰還作家であった。彼らが招聘された

石 崎 等

理由は（軍が、吾々をして、実戦における参謀部や高級指揮官の状況を親しく観察させ、それを作品に書かせるため）（序）三頁）であった。しかし火野葦平たちが宜昌に到着する前に宜昌は陥落し、到着した前後に優勢な蒋介石軍が逆襲してきたために日本の守備隊全員が前線に出動し、宜昌はほとんどからっぽとなり、予定されていた部隊長等への取材はできなかった。しかし六月二日に一泊した宜昌では、対岸から敵の迫撃砲の激しい砲撃に見舞われるという苦難を強いられた。そうしたハンデイがありながらも、招聘の期待に応えようとして出版されたのが『宜昌戦線』であった。

『宜昌戦線』には、戦略と戦術についてのプラスとマイナスが語られている。マイナス面については批判がましいことは書きつけられていない。ただ事実が記されているだけだ。そうした事実の指摘もプラスの陰に隠れがちであり、紙背に徹しなければ容易に見えてはこない。

夜明け前に出発し、睡眠不足の兵隊の強行軍が数日間も続き、短期間で敵の要地を攻略するという戦術は、フィリピン戦線では多く採りえなかった作戦である。宜昌作戦、漢口作戦、広東作戦などで敢行された短期電撃作戦は、のちに皇軍兵士の優秀さの美談として強調されるが、戦略的には華々しい戦果に比してリスクもまた大きかった。宜昌作戦では飛行機による無差別な空爆は歴史的遺産を容赦なく破壊した。冷酷な歴史的現実の前には文学的な感傷など無きに等しかった。宜昌のみならず漢口占領が重慶政府へ与える心理的効果の大きさが最優先されたからである。こうした諸作戦は、抵抗する蒋介石にすべての責任を負わせ、重慶爆

撃の拠点確保のための最大の口実となった。そこには攻略一番乗りという勲功を競う部隊同士の競争意識も作用した。長く伸びた戦線を補給する道路は寸断されていてしかも悪路であった。中国軍が山岳や奥地に逃れてゲリラ化したために、確保した（点）と（線）を維持するには容易なことではなかった。落伍した兵隊がたった一人で何日間もかかって部隊本部にたどり着く例も多かった。火野は園部部隊長の話として（西洋の戦争は後方の兵站がなければ絶対に行かないが、日本軍は自分で後方を切つてすすむやうな大胆な作戦をやる。）という言葉を送りげなく書きつけている（『宜昌戦線 従軍手帳抜粋』、同書二七二頁）。おそらく一将校として戦術の無理が認識されていたと推測される言葉である。兵站が充実していなければ、水も食料も満足に補給されず、行軍の際に携行したものだけで凌ぐしかなかった。水が不足すれば自然のものを利用するしかないだろう。悲惨な例は火野が広東作戦に従軍した戦記『広東進軍抄』（一九三九・三、新潮社）に描かれている。従軍記者もまた同様の体験をした。同じ広東作戦での苦労は、大阪朝日新聞記者の末常卓郎の『従軍記者』（二九四〇・二、中央公論社）にも別の角度から描かれている。

『宜昌戦線』の内容は「小説篇」と「紀行篇」に分かれ、前者には大佛次郎『人間の街』『高慢な心』、木村毅『宜昌占領』『名曲』、後者には木村毅『漢口放送局から郭沫若氏に呼びかける』、大佛次郎『宜昌』『小さな町——従軍のノート——』、棟田博『新戦場から』『さよなら戦場』、竹田敏彦『宜昌入城記』『従軍雑記』、火野葦平『山坡行』『宜昌戦線 従軍手帳抜粋』の一三篇が収録されている。

現在から見て、無価値といえる文章がないわけではない。この中で注目されるのが、『人間の街』『漢口放送局から郭沫若氏に呼びかける』、そして火野の二篇である。木村のものは題名通り、一九四〇年六月二十九日に《XQJD》（漢口放送局）から放送された重慶政府宣伝部長の郭沫若への対敵宣伝の草稿である。これは日文化人の交流が描かれていて貴重な史料といえるだろう。

木村は、日中両国は三千年間兄弟の關係にあるがゆえに（過去の対立抗争の非を清算して、互に助け合ふ唇齒補車の軌道に還つて来なければならぬ）こと、（日本婦人をベター・ハーフとし、日支結合の愛子を日本に残してをられるあなたは、血の上から申しても、日支親善、東洋平和の運動の魁として立たれるに最適の人のやうに思はれます）（同書一四二頁、一四三頁）と呼びかけた。——火野もまた日中戦争を（兄弟喧嘩）であると認識していた節がある。

大佛次郎の『人間の街』には別の意味で重要な問題が扱われている。

湖北省の前線基地に駐屯する水上軍曹は、軍の公用で部下の村田を連れて漢口に出張する。上海から汽船で四日四晩かかる漢口は、一八五八年の天津条約以来外国の租借地となっていた。日本軍の進攻後二年を経た漢口には、内地の欲望を象徴するかのやうに多くの日本人が移住していた。二人は外国人が多い繁華な街のたまたまに目を奪われ、その土地の住民や難民たちとは異質な中国人が広大な邸宅を構えているのに違和感を覚える。彼らは（尊大なやうに見えるきれいな支那人）だった。（戦争）は中国人の貧富の差を一層剥き出しにしていた。街に出た水上は、森鷗

外の小説など一〇冊ほどの岩波文庫を買って個人的な満足を得るのだが、冷淡な人間の街・漢口によって疎外された意識は消えることがなかった。村田は仲間のために菓子や林檎を土産に買ってきた。その頃、岩波文庫に収録されていた鷗外の作品には、『うたかたの記他三篇』『キタ・セクスアリス』『雁』『護持院ヶ原の敵討他二篇』などがあり、一九三八（昭和二三）年五月に『阿部一族他二篇』が出版されていた。

二人は軍用トラックに便乗して前線に戻りつつ、夢のようだった漢口の街を思い出す。道の所要所には若い歩哨たちが配備され、過酷な任務に就いていた。水上軍曹は彼らの要望に応え文庫本を手渡ししていった。そして一冊もなくってしまうのをよしとして、ふたたび任務に還つていった。

この小説は（戦争）が何の、誰のために行われているかという疑問を投げかけている。そしてその疑問は貧しい中国民衆への連帯意識と宣撫と援助というかたち——それは（皇軍による正義）を旗印に、兵隊たちの善意と努力によって支えられていた——によってしか解決のしようがないものと認識されていた。事実（戦争）の意味はそこに収斂されるしかなかったといえるだろう。

こうした（問いの構造）に対する回答は、火野の『山坡行』に象徴されている。この短篇は山坡完全小学校で教師として働く弟玉井政雄を訪ねた折のもので、政雄と教え子との交流を通して、汪精衛派がポスターで主張する（和平救国、東亜新秩序建設、滅共建国）と近衛首相の三大原則である（一、善隣友好、二、経済提携、三、共同防共）とが、あたかも相連携するかのやうに美しく写真入りで描かれているからだ。

また同様な問いは（前線の歩兵の人は實際気の毒ですよ。）『宜昌戦線』（内地はいつたいどうなつてゐるのですか。）（同）という兵隊たちの意見と質問にリンクしている。火野葦平が重視するこの問題は『広東進軍抄』によつて一層深められていくことになる。

七、『戦友に懇ふ』——火野葦平の除隊前後

重慶政府を叩くという目的を早期に達成するために、軍は無理な作戦を計画した。『宜昌戦線』という書物に盛り込まれた文学者たちの作品にはきしみがある。そのことは、重慶攻撃に対する兵隊のタテマエとホンネをはからずも暴き出しているように思われる。

○内地はいつたいどうなつてゐるのですか。どこに行つても同じやうな質問を受ける。それは私たちが除隊する頃内地の様子がどうであらうと考へた時とは、全然違つたひびきを持つてゐる。宜昌戦線で兵隊が内地からやつて来た私たちにさういふ質問をする時には、一種の詰問をするやうな調子がある。（『宜昌戦線 従軍手帳抜粹』、同書二八七頁）

前線基地に駐屯し、間延びした戦線を維持し守っている兵隊が真剣にぶつけてくる質問は、内地の現状は一体どうなっているかということであつた。彼らの任務は、敵から身を守り、前線を維持することであつたが、それは中国民衆との連帯意識とヒューマ

ンな援助を前提とするしかもはや方法はなかつた。同時に、それは兵士としての自分たちの存在意義の再確認を促した。内地がひどいことになり、悪がはびこつてゐるならば、自分たちが（戦争）している意味などないというのが兵隊たちの懐く沈黙の論理であつたからだ。

『広東進軍抄』にはそうした声に真剣に耳を傾ける火野葦平の姿がある。その声が大きく聞こえるようになったのは、火野が兵隊にして報道班員、つまり兵卒の身分でありながら（もの）を書く知識人として、特権的に新聞記者たちと行動を共にすることになつたからである。『宜昌戦線』収録の文章にしても『広東進軍抄』にしても、火野のエクリチュールには兵隊とあえて自己同化しようとする身振りが強く感じられる。火野の身体は何よりも兵隊であつた。『宜昌戦線』はほかに四人の文学仲間がいたけれども、『広東進軍抄』では違つていた。新聞記者たちと一緒に自動車に乗つて長い隊列を追い越して移動することは使命的特権だとしても、火野の半身は依然として軍曹の身分であつた。『広東進軍抄』には僚友とはかけ離れて行動する特権に対する慙愧の思いが感じられる。

一九三九年一月、除隊（除隊時の階級は軍曹であつた）を期に『戦友に懇ふ』（軍事思想普及会）と題した小冊子風の評論集を出版する。表題となつた『戦友に懇ふ』（一九三九年八月、南支派遣軍報道部・非売品）のほか、『戦場より』『帰還兵士の言葉』と題された文章が収められている。三篇とも半年後の評論隨筆集『河童昇天』（一九四〇・四、改造社）にも収録された。

執筆時期は『戦場より』が文末に「（汕頭にて）」とあるよう

に、一九三九年六月、汕頭作戦に従軍したとき、おそらく作戦終了時と推定される。『帰還兵士の言葉』は、文末に脱稿時と推定される「(十一月五日)」の日付けと、除隊後福岡に帰還したときの印象記を合わせ考えると、一九三九年一月に書かれたものであろう。

ここには火野の〈戦争観〉がもつともよく現れている。応召は国家の命令による正式な兵隊だが、報道班員としての従軍は小説家としての立場から半ば自分の意志によるものであった。三篇とも兵隊から作家・報道班員へと移っていく火野の転機を示す重要な意味を持っている。フィリピン戦線に参加以降に着用した従軍服は、カーキ色で兵隊のものに似ていたが兵隊服ではなかった。

火野は『戦友に懇ふ』の中で戦場において日本兵が行なった非人道的な行為に言及している。大多数の兵隊は〈精神が純粹である〉(五三頁)けれども、一部の兵隊には〈粗野で、乱暴であり、傲岸〉な者がいたことを認めている。そして、兵士たちの粗暴な悪の面を帰還して内地に持ち帰ってはならないと指摘し(一一二頁)、〈戦争の凄烈な面貌に負けまいとする兵隊の反発が、一方に於ては或る粗暴の反面を現はした。それは戦場ではまた必要でもあつたのである。〉(戦場にあつては、兵隊の名を辱かしむる兵隊が若干はあるのである。)とし、兵士の粗暴に対して〈さまざまな性格を持つた人間〉がいるゆえにしかたがないと一定の理解を示したうえで、やがて彼らも訓練と経験によって美しい日本の軍隊の一員となるべきことを訴えた。

火野の信念を揺るがすような兵隊の暴威が他民族に対して行われたとき、彼ははどうするか。中国の民衆の犠牲と苦難についての

解答はない。〈戦争〉の意義を終生課題として先送りしていくしかなかったであろう。

火野が兵隊に告げようとしたことは、兵隊は〈一個人〉ではなく〈日本〉であり〈歴史〉だということだ(二三頁)。しかも〈皇国の軍隊は強く、美しく立派〉でなければならぬ。こうした哲学では〈個人〉の自由は制限される。日本の軍隊は道徳機関としての意味をもっている(一九頁)。だから、生命を賭して戦つたという理由で、①少々のことは許されるべきだという理由などない(生死の極限状況に置かれているがゆえに〈この位のこと〉はしても咎められることはないのではないか)(一八頁)という考えは許されない)、②国に恩を着せるべきではない、③他者に強要して吹聴すべきことではない、と火野は兵隊を戒める。そう告げざるを得なかったのは、兵隊の中に目に余る行為があつたからにほかならない。火野の倫理観はそれを許すことができなかつた。

『戦友に懇ふ』を書いた時点で、火野が南京で起きた日本軍による大虐殺の規模をどの程度知っていたか推測する手立てはない。火野は〈或る粗暴〉といい〈兵隊の名を辱かしむる〉と暗示的にしか表現していないからだ。しかし南京の行為が〈戦場〉であつたといえるかは疑問だろう。軍は広東攻略に際して同轍を踏まないよう戦術的に配慮したきらいがある。『広東進軍抄』には具体的な記述はない。こうなると兵隊の語り部としての立場から書かれた従軍記が、『麦と兵隊』がもつていた内地の人々への情報伝達というような機能をもたなくなる。

『戦場より』は、応召以来三年目に入り、汕頭作戦を終えたときの感想である。火野は〈軍の占領地域に行はれるいはゆる大陸

進出の現象（四九頁）に触れ、〈軍の占領地域に一仕事はじめんとしてやつて来る人達〉に対して〈腹が立つこと〉（四九頁、五〇頁）が目につくようになったと語っている。そうした人たちのことを考えると（我々の犠牲が無駄に終るのではないか）（四七頁）という疑問に駆られる。火野は具体的な例を挙げて論じていく。

すでに数千人の内地人が店を開き商売をしている或る土地で戦没勇士の慰霊祭が挙行された。そこには広い居留民席が用意されていたのだが、多くの空席が目立った。〈軍の占領地域に行はれるいはゆる大陸進出の現象〉の典型としてこの事件が取り上げられている。これを見て火野は出席しなかつた居留民の退去命令を出して貰おうとまで考える。火野は一兵士としての立場から戦没者を軽視する日本人のモラルのなさを憂い、生死をともにした多くの兵隊を代表して道学者としての身振りを強くする。

戦争が日常化するとともに、〈大陸進出といふやうな隠蓑を着て戦地にやつて〉きて一儲けしようとする人間が後を絶たない。そういう輩には商売に愛国も憂国もない。生きるためには金儲けしかないからである。軍隊は治安維持につとめ自分たちを守ってくればよい。そのために税金を納めているのだ——という論理を否定することはできない。火野は〈兵隊の心を暗くするやうな狐や狼〉を嫌悪する。しかし小狐や小狼の存在を否定し去ることなどできはしないというディレンマに陥る。

火野は〈戦争〉の崇高な意義、〈占領〉の価値を疑おうとしなない。しかし逆にいえば、一部の国民は〈戦争〉に崇高な意義など考えず、その犠牲者に哀悼の気持ちを表現することなく、戦勝と

占領を単なる金儲けの手段程度にしか考えていなかったことは事実である。これは〈戦争〉をその程度にしか見積もつてはいなかったことを意味する。そうであるがゆえに、〈この戦争に関する真の意味を捜すことは、私の一生の仕事とすべき価値がある〉（四五頁）という蟻地獄のような問いを抱え込まざるを得なかったのである。

八、火野葦平の〈戦争〉哲学

火野葦平の〈戦争〉哲学の根幹は〈日本を支へ、日本を美しくして行くこと〉（『帰還兵士の言葉』、『戦友に懇ふ』八一頁、以下引用は同書より）にあった。これは抽象的な物言いでも分かりにくい。しかもその哲学が極限に達し〈戦争〉が敗北で終結したとき、〈美しい日本〉は過去のものなのか、それとも敗北後にも未来へ続いていくものなのか。〈美しい日本〉は軍国主義とともに滅ぶべきものなのか。〈美しい日本〉が滅びの美学だとしたら、軍国主義は〈滅び〉のイデオロギーなのか。敗戦後、川端康成はもはや過去の〈美しい日本〉にしか生きるしかないと言った。この言葉は私たちを脅迫する。川端の感想は『帰還兵士の言葉』とリンクしていくのだろうか。

兵隊は〈日本が前進し、日本がよくなり、日本が美しくなれば、兵隊は満足する〉（『戦場より』四八頁）がゆえに、生命を挺して中国戦線で戦った。〈自分が行かうと思つて行つたわけではないが、軍の作戦の要求するままに、私たち兵隊は全く文字通り南船北馬であつた〉（四五頁〜四六頁）しかし転戦を重ねたその過程

で、兵隊は（支那を知った）（二三頁〜三四頁）。火野個人にとつても、二年間の転戦生活を兵隊とも過ごしたことは貴重な体験であったし、除隊しても——戦友とは違う変則の帰還の仕方であつたが——（一個の兵隊として生きたい）という思いは強かつた。

つねに兵隊と同化して物を考える火野の本心は（戦地にある兵隊が、若や銃後の人々が我々兵隊のことを忘れてしまつたのではないだらうか、と考へる程淋しくも悲しいことがあるであらうか。）『帰還兵士の言葉』七九頁）という言葉にあつた。こうした心境は（現地にある兵隊を忘れないで欲しい）と反復される。兵隊が銃後の人たちから労られ、励まされ、忘れられることは兵隊がもつともつらく悲しいことだと強調する。

これは要するに、国民との断絶こそが兵隊の戦意喪失をまねき、敗北を促しかねない危機感を指摘したものである。戦略を練り、敵を打ち負かすことを第一義とする参謀などはるかに及ばない哲学がある。しかし内地の人々に理解されない（戦争）は戦略・戦術ともに土台無理な（戦争）にほかならなかつた。それを淋しいとか悲しいとかいうことは一片の感傷に過ぎない。

とはいえ、火野のこうした感慨は、日支事変が始まり広東作戦に至つた段階でなされたものである。国民の間に兵隊への関心が薄れ（戦争）への無関心がはびこりつあつたことは否定できない。新聞ジャーナリズムは新しいトピックとして戦果だけを華々しく報道した。兵士たちの苦労は片隅に追いやられつあつた。火野の感慨にはそうしたメディアへの批判が込められていた。

こうした膠着化した戦況を打破するには、（戦争）を再定義し、

新作战によつて局面を打開するのが近道であつた。軍部は戦略を見直し、メディアを通して（暴戾支那）（膺懲支那）から（打倒蒋介石）という標語を打ち出し、それを護符のように唱え始める。林芙美子や野上彌生子のような人までが蒋介石憎しの言葉を公にして憚らなかつた。

火野は忘れられつつある証拠として、郵便物や慰問袋の減少を挙げている。もし火野の直感が正しければ、中国戦線は兵士たちにセンチメンタルな気持ちを抱かせる無理な（戦争）だったこと意味する。

火野には、兵隊と共に中国での戦場をリアルにみることを通して、広大な場所での警備によつてしか軍事的なプレゼンスが維持できないような（戦争）は、無理のある（戦争）ではないかという疑いが生じつあつた。彼は戦闘よりも警備の苦労を強調する。広大な中国大陸では、点と線を支配してもそれは全体的なプレゼンスに至らない。（私は警備についてからの地味な苦労が真に戦争の苦労であり戦争の姿である）（『帰還兵士の言葉』七〇頁）という言葉がそれを証明している。火野は（建設宣撫）の仕事の重要性を指摘する。しかし（戦争）そのものが作戦的に無理なら（建設宣撫）は容易ならぬ仕事となる。（建設宣撫）が無理なら（戦争）は勝利のない未完成の道を走り続けることになる。

将校を始めとして職業軍人は概して高給取りであつた。応召された兵隊は安い俸給で命の危機に直面するわけだから、内心不満を蓄積させる。軍は鉄のように堅固な組織であり、そうした不満分子を早くから（教育）によつて馴化していた。兵隊は生死を賭して戦うのだから、その代償として国民に何がもたらされるか、

どういふ利益を受けるかといふことに無関心ではいられなかつた。もし正当な（戦争）の大義がなく、多額な軍事費を使い、作戦に多くの兵を投入しているにもかかわらず、国民が何の裨益を受けず、しかも戦っている兵隊に対して冷淡であつたなら、兵隊は自分たちが（戦争機械）の一部品であり、自分たちの（戦争）もその死も無意味ではないかといふ疑問を抱くだろう。ひいては捨て駒としての役目しかなかった。兵隊たちの救いは、内地の人々の熱い支持だけであつた。俺たちにもつと休息と飯を」と叫ぶものがあつたら、それは燎原の火のごとくに兵隊の間に広がり、事態は容易ならぬ方向——参謀たちへの反抗——へと發展する可能性を秘めていたはずだ。では何が兵隊にそうはさせなかつたか。短期決戦ゆえに（行軍）と（睡眠）のみを強いたからである。兵隊は黙々と行動し考える余裕などなかつた。後方支援が遅れがちなか中、乏しい食料で、へとへとになつて歩き、倒れ、眠るだけであつた。先頭の戦車と超人的な精鋭兵が神速に動き、（敵）と遭遇し、蹴散らせてしまえば、あとは目的地を目指して蟻のように行軍するだけであつた。落伍もまた許容された。全員が強靱な肉体を持ち敢然と戦うことはなかつた。強力なロボット化した（戦争機械）としての精鋭部隊が順繰りに先陣をつとめていけば自ずと戦局は開かれた。こうした戦いの仕方は、戦形が長くなり、兵站部には弱点が生じる危険があつたが、短期決戦を目指しているかぎり有効であつた。宜昌作戦も同様であつた。彼らは（皇軍）の兵であり、鉄のような規律によつて徹底的に教育されていたからである。兵隊に人間的な欲求など不必要であつた。

九、兵士と大衆小説

大佛次郎は（数億と云はれる民族の生活を観念が殺戮してゐる）と蒋介石を意識して書いているが、それは表向きの表情であつた。（戦争）の意味を問ひ、兵隊の不满に真摯に向き合おうとしていたのが一九四〇年の大佛次郎や火野葦平にほかならなかつた。

大佛はすでに（書かれたもの）に悪を見ようとはしない。むしろ軍隊組織の公共性には反する（教養）や（娯楽）を散布する。大佛には従軍作家の自己保全の意識が働いていない。むしろ日本兵の悲惨な死をリアルに扱わないという禁止コードはあつたが、従軍作家の書くものに厳しい縛りをつけるのはもう少し後のことではないだろうか。

軍隊は指揮官の無謀な命令であつても戦略・作戦のためには従わねばならない組織である。個人個人が自ら作り上げてきたアイデンティティーと規範とを極力抑制しなければならぬ。そこには皇軍という絶対善の網をかぶせた陰險ともいえる規律的な権力が隠蔽されている。戦場のエクリチュールは、軍隊の中の統制された恣意的ともいえる言説編成の下に置かれる。水上軍曹が岩波文庫を買い求めたものの、自分では読まずに戦場の兵士にばらまくという行為は何を表象しているのか。同じ兵隊として過酷な任務と無聊を慰謝するための連帯の意志表示を表現したかつたからではないだろうか。

宜昌は揚子江では六港の一であり、四川貿易の中継点であつた。

ここを攻略し飛行場を確保すれば、蒋介石の拠点である重慶爆撃作戦が可能となる。そういう意味では宜昌作戦は蒋介石軍をたたく上で重要な作戦であった。しかし戦術的にはさまざまな点で問題があった。ひとつは、日本軍は兵站の充実を無視して、後方を断つて進軍する大胆な作戦を展開したわけだが、そうしたことによって軍の組織や規律が緩み、敗戦後の東京裁判で指揮官が戦争責任の罪に問われるような事態を孕んでいたのである。

中支派遣軍司令部は大佛ら文学者に従軍を要請し、宜昌戦線の実態を（書かれたもの）として公表することを期待した。もし（書かれたもの）を悪として告発するとしたら『人間の街』は成立しないだろう。岩波文庫版の鵬外が幾人かの兵隊に手渡される行為は、戦場で（書かれたもの）を渴望し（人間）的なものを求める兵隊の行為を肯定していることにはほかならない。ただメディアが発する内地の情報は戦場の兵隊たちに思わぬ結果をもたらした。

「前方に銃声あり」

こんな報道も屢々伝へられて、幾度かトラツクは止まった。

私と同乗の兵士は、そんな時に傍から古い雑誌を出して読みつづけてみたが、それが去年の九月号の婦人倶楽部だった。ちよつと借りて覗いてみたが拙作『涙の責任』が載つてゐるのを見て、何ともいへない懐しい気持だった。火野君の車には『キング』、菊池中尉の乗つた車には『講談倶楽部』の昨年の新年付録の小説集などがあつた。（竹田敏彦『宜昌入城記』、『宜昌戦線』二二二頁～二二三頁）

総合雑誌や思想系言論雑誌などは戦場で禁じられていたらしいが、婦人雑誌や大衆雑誌は誰が持ち込むのか。軍情報部が大量に仕入れて配布するのだろうか。それとも兵隊が町に出たときに購入したのだろうか。慰問袋の中に入っていたものを分配したのだろうか。そのときチェックは行われたのだろうか。

出征のとき、かさばらない文庫や新書などを携行した例をよく聞く。軍は思想性の強い書物や雑誌については制限したろうが、婦人雑誌や大衆雑誌については比較的寛大であつたのではないかと推測される。しかしそれらの雑誌に掲載された狭い情報が拡大されて兵隊の間に流通し、波紋を広げていった例を火野の記録が伝えている。そうした兵隊の国内動向への関心と憂慮を火野は真摯に受け止め、文章にすることによって内地のジャーナリズムに自制を促そうとしているようだ。

しかし火野の文章をたんねんに読むと、言外に宜昌作戦に対する批判が感じられる。火野はもつとも兵隊の気持ちに寄り添おうとした作家であつた。兵隊の疑念は兵隊を体験した火野にしか伝わってこない真実であつた。

大佛次郎には中国民衆を宣撫しようとする気持ちはない。兵士の実態をリアルに描いて戦争の悲惨さを告発しようとしているわけでもない。大佛は、日本と深いかわりのあつた魯迅や郭沫若が否定しようとした古い中国への郷愁に駆られていた。一方、火野葦平の執筆の姿勢はつねに兵士の実態を把握することと平定後の宣撫活動に結びついている。兵士の観察は鋭く、しかも戦場をリアルに見る眼は抜群である。自己準拠化した認識主体は、同一

の素材を扱つても他の作家たちとは明らかに違つてゐる。たとえはその好例は創作のための手控えともいえる『宜昌戦線 従軍手帳抜粹』に示されている。

『山坡行』は弟の政雄との四年ぶりの再会を描いた作品である。弟は兵隊上がりで、現在武昌県の山坡完全小学校で教師として働いている。子供たちからは「玉井先生」として慕われ、山坡の教育環境がよくなつたとまでいわれ、兄として誇りに思う。火野は持参したスメドレーの『奉天三十年』（岩波新書）を非常によい本だから読めと手渡すと、弟はもうすでに読んでいると答える。ここでのスメドレーは中国との戦争だからこそ意味をもつ。一年に満たないファイリピン戦線ではこうした「テキスト」はまったく不在であつた。

十、日記『兵隊の地図』——〈楠公精神〉と〈菊水〉の紋

論述してきたように、現役の兵隊を退役した火野葦平は作家となり陸軍報道班員となつた。報道班員は戦争の遂行者ではない。同伴者であり戦場の記録者であり発信者であつた。また任務として宣撫活動があつた。避難民への援助とケアも含まれていた。作家であるかぎりそこには作家としての眼があつたはずである。それは彼の文学にどのような影を落としてゐるだらうか。

火野はファイリピン戦線に報道班員として従軍し、その日記『兵隊の地図』（一九四二・八、改造社）を残している。装丁・挿絵は同じ小隊に属していた従軍画家の向井潤吉。写真は熊井健夫が撮影した。任務は〈新しい状態に即応しつつ対敵宣伝をやる〉こ

とであつた。¹⁰⁾

その中に「〇〇部隊長」の言葉として、ある将校の見た兵隊観・戦争観が示されている。多くの部隊長は人品高潔で、立派な訓話¹¹⁾が披露されている例が多い。そうした言葉もまた〈戦争〉の語り部として記録しなければならない。

「精神教育といふものは恐ろしいもので、この部隊は日ごろから楠公精神で鍛へてあるので、なかなか兵隊は強いです。兵隊は帽子やシャツなどに、菊水の模様をつけてゐるでせう。兵隊は死ぬものだといふ覚悟は立派です。算盤をはじいてゐる者が多く、鎌や斧や鋸を使つたりすることは苦手ですが、戦闘に不覚はありません。（中略）濠洲もこの勢ひで、一挙にやるんですな」
（『兵隊の地図』一七六頁～一七七頁、傍点引用者）

この部隊は商人が多く、農業・林業などは苦手だが、〈楠公精神〉と〈菊水〉の紋によつてつねに死ぬことを恐れずに戦闘に従事しているから、オーストラリアへの進攻も可能だらう、という内容だ。このことは「〇〇部隊長」一個の見解ではなく、陸軍上層部にはかなり共有されていたのではないか。¹²⁾

もちろんそこにはマッカーサー大将の動向が関わつてゐる。日本軍のマニラ入城の直前まで、マッカーサーはマニラホテルの五階の全フロアーを使用してアメリカ軍ファイリピン総司令官として指揮を執つていた。¹³⁾彼はケソン大統領とともにコレヒドール島に撤退し、そこで作戦を練り直し援軍の到来を待つていたのだが、バターン半島をめぐる攻防の急展開と〈米比軍〉の敗北を予測し

て、オーストラリアへの脱出を余儀なくされたからである。

それにしても、死を恐れない強い軍隊組織によって無限に拡大される〈兵隊の地図〉の夢想的言説を取材し、紹介している火野葦平の立場はどこにあったのだろうか。もう少し別のところにあつたように思われる。少し前の、始めて遭遇したアメリカ兵の捕虜を描いたところにそれが現れている。フィリピン戦線において火野葦平が真の〈敵〉であり〈他者〉として認識しようとしていたのは〈アメリカ兵〉であつた。しかしそうした現実と直面しない事態に苛立ちを感じていた。

米兵の捕虜が三人、針金でつながれて来た。はじめて見る米兵である。一人は相当年配の背の高い男で、下士官らしく、あとの二人はまだ若かつた。(中略)私は米兵を見たときは、なにか大らかな安堵の気持ちのわくのを覚えた。私は支那の戦線で多くの捕虜を見たが、その同じ皮膚の色と、あまりにも似ている顔立ちとに、常にある困惑の気持ちをおさへることができなかつた。比島の戦線に来て、比島兵を見ると、やはり似かよつた感慨が抜けなかつた。いま、米兵を見て、私ははじめてのやうに、われわれの戦ひの意義をきびしいばかりに痛感することができた。小さな人道主義はもはや感傷にすぎないのである。われわれはわれわれの怒りと憎しみを、神聖な、より高いものに昂揚することは、われわれの義務なのである。(『兵隊の地図』一七一頁―一七二頁、傍点引用者)

指導民族意識国家の一員としての夢想的な暴走ともいえるこ

した感想は一貫している。『兵隊の地図』は単なる従軍記ではなく、火野の戦争観の強さと弱さの露呈した自己対話の書でもあつた。兵隊の中には日記や覚書をたんねんに手帳に残すものもいた。短歌や俳句を詠む者もいた。たとえそれがエゴイズムであつたとしても、彼らにとつては自己凝視の時間であり、独り苦しみ嘆き、咄く慰めの時間であつたにちがいない。しかし『兵隊の地図』には〈われわれ〉が前面に出て兵隊たちを併呑し、エゴイズムは悪として消去されている。火野は一人の作家でも報道班員でもなく高揚した語り部にならうとしている。

十一、アメリカ、アメリカ……

火野はアメリカ兵の支配下にあつて日本兵と対峙する前線に配置され、食料などで差別待遇を受け瘦せ衰えているフィリピン兵に同情し、同じアジア人としてアメリカ軍将兵に強い憎しみと嫌悪の感情を顕わにした。それは〈戦ひの意義〉つまり倒すべき真の〈敵〉としてアメリカが現前した安堵感に裏打ちされたものであつた。ここには人種的な嫌悪感というものがある。しかしアメリカ(兵)への〈怒りと憎しみ〉を〈神聖な、より高いものに昂揚すること〉が〈戦ひの意義〉だとしても、具体的にどのようない実践を意味しているかは抽象的過ぎていて分かりにくい。この〈問ひの構造〉は公的ともいえる『比島戦記』(一九四三・三、文藝春秋社)では次のような露骨な優越感となつて明確化されている。この違いに注目する必要があるだろう。

そのときの米兵の捕虜はいづれも兵卒で、背のたかい一人が下士官であつたが、突撃をした日本の兵隊が銃剣を突きつけると、たちまち両手をあげて降参したのである。投降さへすれば生命だけは安全だといふ蟲のよい考へかたである。これが、いはれない侮蔑をわれわれの国に加へ、祖国の存立をさへ無視しようとした傲慢な国の国民なのだ。私は日本民族としての矜持に胸がふくれあがる。トマトのやうに赤茶けた彼らの顔を見て、私はきはめて不潔なものを見たやうな思ひになる。私たちが日本民族としての怒りをいかに高邁な使命にまで高めつつあるかといふことを、このやうな時ほどはつきりと感ずることはない。〔比島戦記〕九七頁)

投降したアメリカ兵がひとしなみに〈侮蔑〉と〈傲慢な国の国民〉であつたと判断する根拠はまったくない。火野は〈小さな人道主義はもはや感傷にすぎない〉からそんなものはこの際捨て去るべきだと主張している。アメリカ兵に〈不潔なもの〉を感じ取り〈日本民族としての矜持〉と〈怒り〉を顕にする。逆の立場だつたとはいえ、大岡昇平の場合には考えにくいことだ。

それにしても、一人の下士官をその代表としてあげつらうことは作家としての立場から逸脱しているように思われるがどうだろうか。彼もまた戦争の犠牲者かもしれないのに、そうした見方をとれないのは、日本兵が戦争の犠牲者でもあつたという視点が欠落しているからである。さらに言えば、火野は中国戦線からフィリピン戦線を体験してきて、〈皮膚の色〉〈顔立ち〉という点で日本人が中国兵やフィリピン兵と類似していることに困惑してい

る。こうした類似性への戸惑いは〈トマトのやうに赤茶けた顔〉の出現によって変質する。〈トマト〉という比喩は〈日中比〉三民族の類縁性によって大東亜思想を招き寄せ、〈トマト〉との差異化を鮮明にしたからである。火野もまた〈補公精神〉と〈菊水〉の紋に絡めとられていたからではないだろうか。

ちなみに『比島戦記』は戦果を強調する公的な戦記として当然のこととして、勝者⇨強者⇨日本兵・敗者⇨弱者⇨アメリカ兵の対比関係が明確に編集されている書物である。引用した一文の右ページには一四枚の写真が挿入されている。その一枚には、坐つて手を組まれた数百名の呆然とした捕虜の群れがあつた。

火野葦平は「四月五日(カトモン河畔)」でみすばらしい姿で捕虜となつたフィリピンの師団長であるカピンカピン代将(同書一六一頁)の心理を『敵将軍』という作品で濃密に描くことほできても、敗北のアメリカ将軍については想像力を働かせて作品化するができなかつた。しかし宣撫活動の一環として日本軍に協力するフィリピンの将兵を小説にするには意味があつた。『魔法の杖』ではフランススコ少将が描かれている。戦争に敗れた少将はデル・ピラル兵営でフィリピン兵に対する捕虜教育隊長として日本軍に協力するのだが、いつも不機嫌な表情を浮かべていて笑わない。大きな運命と歴史の流れのなかに生きる人間の内面が掘り下げられている作品として評価されるべきであろう。しかしバターン作戦を成功させるために、〈悲壮な肉弾戦法〉により戦友の屍をのりこえ、間断なく襲つて来る敵日本兵の恐怖を將兵の立場から書くことはしなかつた。火野にはそうした構想力に乏しく、錐を採みこむような先鋭的な思考のみがあつた。

火野葦平の〈戦争〉は、上述してきた〈問いの構造〉とは別の〈問いの構造〉に対する回答を用意する。タイトルの〈兵隊の地図〉には次のような兵隊観がこめられている。

どこにも新しい戦場といふものはありはしない。(中略)進歩した考へなどはまるで浮んで来ない。兵隊は使命感にあふれてゐる。それを意識するとは問題ではない。私はこの雄渾な兵隊の奔流はそのまま神話の世界からぢかに続いて来てるやうな感動を受ける。兵隊はその気魄と勇気をもつて、つぎつぎに新しい地図を描きひろげてゆくのである。(同書一八八頁―一八九頁、傍点引用者)

神話時代に淵源する雄渾な兵隊の連続性。兵隊は死ぬものだという玉碎ともいえる戦争観。バターン半島の攻防は兵隊の肉体を圧倒する飛行機や戦車などの機甲部隊の威力をどう効果的に使うかにあった。制空権は日本軍が握っていた。しかし最終的には機械化された軍勢力ではなくて組織化された〈兵隊の奔流〉つまり〈肉弾戦〉がものをいった。火野は〈兵隊の奔流〉に身を任せ、押し流されながら〈涙の出る思ひ〉を率直に感受する。その流れは一体どこまで続いていくのか。ここまで来ると、砲弾の音によつて軌道や敵の砲兵陣地を冷静正確に測定したという作曲家クライスラーの挿話の紹介(三月十九日(バラナガ) 同書三七頁―三八頁)や『ニールベングンの歌』(同七〇頁)を読んで感動した箇所などに示された文化的な香からは遠く離れて、〈戦争機械〉と化した兵隊に対する冷酷なアジテーターであり、自己放擲とし

かいてないだろう。

注

(8) 武藤章は一九四二年四月二〇日、在スマトラの近衛第二師団長に転出。一九四四年一〇月五日、「捷一号地上作戦」指揮のために山下奉文大将が第一四方面軍指令官に任命されると共に、山下の希望で第一四方面軍の参謀長となりマニラに着任。敗戦後の一九四五年九月二日、山下奉文大将らと共にルソン島山中で敗軍の将となり、下山してキアリガンの米軍前線指令所に出頭した。戦後、巣鴨拘留所に送られA級戦犯として処刑された。

(9) この場合は、市街の本屋で新刊本を買ったのだろう。一体戦場ほどの程度の本や雑誌が流通していたのだろうか。臼井武夫は「野戦病院の文庫」(『文庫』一九五八・二)というエッセイで、野戦病院の図書室には、講談本、小説、岩波文庫などが備えられていて、人が読まない外国文学を読んだこと、文庫の表紙裏には、献金による恤兵品で印刷発行されたものだったと書いている。また、部隊に帰還したとき、内務班の片隅には、恤兵品版の岩波文庫の「心」が転がっていて、それを読んだ感動を報告している。文庫はハンディーなために好まれたようだ。

(10) 『兵隊の地図』は向井潤吉の『南十字星』(一九四二・一二、陸軍美術協会出版部)と同系列の本であり、筆者の個性が出ていて対比して読むと面白い。報道班員として対敵宣伝や宣撫活動に奔走する姿が叙述の何割かを占めている。

(11) 『兵隊の地図』に〈渡辺少尉が、私たちが初年兵のころ、教官殿が大平洋を中心とする日本の経済などといふ話をされて、大きな話をするとき私たちは煙にまかれておりましたが、いま、や

つとわかりました。といふと、堀田少佐は会心の笑みを浮べて、俺のいふとほりになつて来たらうと、笑つた。》(同書一七九頁)とある。こうした教育体系もまた指導民族としての意識を軍人たちに植えつける要因となつた。

(12) 木村毅「マッカアサアの室」(『マニラ紀行 南の真珠』へ一九四二・一〇、全国書房)収録。同書二七頁―三八頁。この文章で木村は知日家であるマッカーサーの肖像を公平な立場から描いている。

(13) 慶応義塾大学文科に学び小説家志望だつた中山富久は、大東亜戦争直前に再度の応召をして、砲車小隊長としてバターン・コレヒドール攻略戦に参加した。作戦の終了後、負傷した中山は病院船で帰還し、日記の一部を雑誌に発表し、周囲の勧めもあつて統稿を執筆、それらを『砲車小隊長の手記』(一九四三・七、協栄出版社)として出版した。

(いしざき・ひとし 本学名誉教授)